

## 年貢町復興住宅におけるコミュニティカフェの提案

A2201408 小山真由

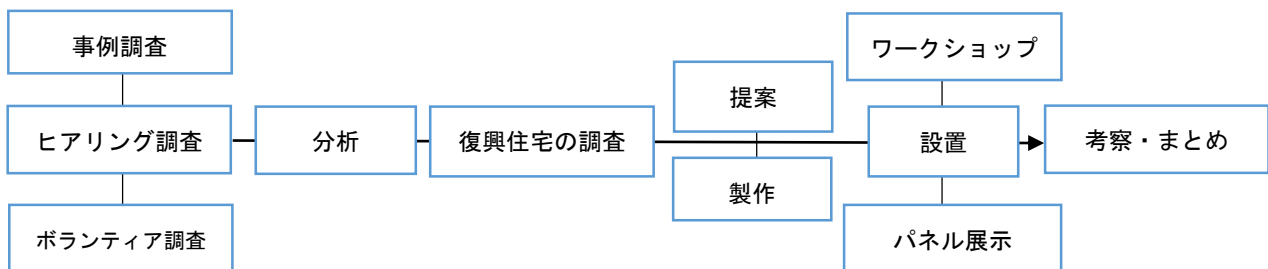
### ▶ 研究の背景

東日本大震災で被災した、多くの方は未だに仮設住宅・復興住宅で生活を送っている。復興住宅には、様々な地域から世代等異なった方々が集っている。東日本大震災によってつくられた復興住宅には数は少ないが交流のための、ちょっとした憩いの場である集会所やカフェ等が設置されている場合がある。例えば、岩手県陸前高田市にある「りくカフェ」は、通院する際、気軽に被災者が立ち寄れる個人病院に併設されたカフェで、その賑やかな空間には、立ち寄りたいたいと思わせる空気感が在り、ひとり、ふたりと徐々に被災者が集うようになっていった。一方では、そのような場所がなく住民同士の交流が図れずに、閉鎖的になってしまっている所もある。今回カフェを提案する年貢町の復興住宅は入居以来、ほとんど交流の機会がなかったところであった。年貢町復興住宅にヒアリング調査、カフェの提案を行った際、集会所はあるものの具体的な団地内でのコミュニティ形成はなされていないようであった。四つの市町村の方々が共同で住んでいること、また、高齢者の単身世帯が多いということもあり、外に出る機会が少ないというヒアリングの結果だった。そのような現状を少しでも緩和し、コミュニティ形成のきっかけづくりができればと思い、提案を行った。現在、集会施設は家具の置かれていない状況であるが、そこにテーブルとイス等を製作して設置し、人々が集えるようにしようと考えた。また、そこで不定期ではあるがカフェを運営し集まった住人の方々、特に高齢者を中心としたものづくりのワークショップを行うこととした。具体的には住人の方から簡単な彫刻のような作品作りがしたいという要望があったので、故郷の思い出の写真を入れる「フォトフレーム」を製作することとした。

### ▶ 研究の目的

ボランティア体験を踏まえ、コミュニティカフェの現状と可能性等の分析を行う。その分析をもとに年貢町復興住宅でコミュニティカフェを実際に運営し、コミュニティ形成に有効と考えられるワークショップ等実施する。また、今回の企画やワークショップの様子、住人の方々が持ち寄った写真等をパネルにまとめ、展示を行う。最後にアンケートを実施し、今回の活動等の評価、フィードバックを行う。

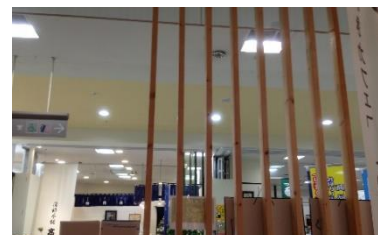
### ▶ 研究の進め方



りくカフェの様子



「」カフェ内部の様子



「」カフェ正面の様子

## ▶ これまでの活動

### ■ 事例調査

事例調査で「りくカフェ」・「かぎかっこカフェ」などを調査

### ■ ヒアリング・ボランティア調査



りくカフェスマートクラブの参加者

6月から夏季休業中の間に「りくカフェ」と「りくカフェ」にヒアリング調査とボランティア調査に行った。カフェでは、簡単なワークショップを行い、震災により途絶えかけた交流を行うための拠点となっていた。コミュニティカフェの活動をされている方にインタビュー調査を行いカフェの内容、来訪者の声や様子などを調査した。

### ■ 提案



年貢町復興住宅内部



年貢町復興住宅

その後年貢町復興住宅へ卒業研究のプログラムの提案を行った。そのなかで板の間で利用するテーブルや掲示板、家具などの要望があり、集会施設を活用して頂くための家具製作をすることとなった。

### ■ 成果物



短大の木工室での作業風景

木工室でテーブルを製作し、年貢町復興住宅へ寄贈した。このテーブルを使ってワークショップを行った。コミュニティカフェは三回行い、ワークショップでフォトフレームづくりも行った。学生がサポートに入り、学生と参加者の方との対話もでき、復興住宅におけるコミュニティの基礎となる、活動をする事ができた。



カフェの様子

### ■ 考察



復興住宅では、広い集会所などがあり住民の方が集う場はあるが、そこが有効利用されていないようだった。ヒアリング調査で、時々イベントがあるときのみその場を使用し、日常的に利用されていないことがわかった。その理由として、集まって座るためのテーブルや椅子が常設されていない点、場所の空間作りができていない点などが上げられた。その解決策として、テーブルと椅子の要望があり、実際にデザインを考え製作し、寄贈した。カフェには、住民の方が集まり、3回にわたりフォトフレームの製作を行った。

カフェの最終日に参加者の方に意見を聞き、今回のカフェについての感想を聞いてみたところ、参加者の多くが、このような行事を是非定期的に行って欲しいとの意見が多くあった。ワークショップでは、フォトフレームを作る際、デザインテーマを自分の街の特徴的なものをモチーフにすることにしたが、参加した方は彫刻などで作業をする機会があまりなく、真剣に取り組んでいた。このように少しずつ交流が生まれ、外に出る機会が増えることが重要であると感じた。